

『俳諧玉言集』夏之部

翻刻

杉田 美登

『俳諧玉言集』は越後高田榊原藩士、鈴木（左内）魚都里なづりが天保一三（一八四二）年に編さんし、出版を目指した芭蕉全集の最大のものである。芭蕉の伝記・発句・連句・付合・紀行文・消息・遺語等に部立てし集大成したもので、これまで芭蕉の最大の全集とされた水戸藩士の幻窓湖中（岡野重成）と古学庵仏兮が編さんしに刊行した『俳諧一葉集』文政一〇（一八二七）年刊行を大幅に更新したものである。

芭蕉が生涯に詠んだ句は九二九句を数えるが、さきの『俳諧一葉集』が発句一〇八三句であったのに対して『俳諧玉言集』では一二二二句を収める。したがって「夏の部」二八三句、その内存疑三〇句、誤伝四句を含む。特筆すべきは、編者魚都里が新発田の城下、中村竹市が所持する芭蕉の短冊「松しまや夏を衣裳に水と月」を所持し、衣裳塚を築いたことを記していることである。芭蕉句の全てを収録しようという意気込みが見られ、文献の外に自らも調査にあたっていたことが知られる。あるが、ここでは発句の「夏の部」を翻刻する。

二十二丁

○夏の部

更衣

句集 旅行

一つぬいて後に負ぬ旅衣 笈の小文 句撰 あらの、小文庫二前切れて見え  
えずとありて一つ脱てせなに負けりと云々。

郭公

清く聞耳に香焼てほととぎす●此ては上へかかる心にて 虚栗 泊船

蕉句 あらまき 一葉

子規なきなきとふぞいそがはし 泊船集 句集貞享四 句撰 続虚栗

須磨の海士の矢先に啼くか子規 笈の小文 句撰 蕉翁句集 泊船集

不木一周忌 琴風興行

時鳥鳴音やふるき硯箱 北向雲竹へ消息 泊船集 句撰 句集元禄二

泊船集明石

ほととぎす消行方や島ひとつ 笈の小文 句撰 句集

二十三丁

郭公うら見の瀧のうらおもて 句集 元二 句撰 一葉に裏見の瀧

野を横に馬牽むきむけよほととぎす おくの細道 あらまき 泊船 句撰

句集 猿蓑

○思ふべき雲井ならねば郭公駒牽むけてしたふ声かな

高覚（久）の宿 行脚夫水写来る 文章あり 文章之部に出、

落くるやたかくの宿のほととぎす 句集元禄二

ほととぎす正月は梅のさかりかな ●北向雲竹へ消息 句撰集 句集

泊船集と虚栗に、梅の花さかり

子規大竹藪をもる月夜 嵯峨日記 笈日記 句集 句撰

ほととぎす啼や五尺のあやめぐさ 詠嘆のヤの範例 初便 泊船 句撰

句集元禄五

木かくれて茶摘も聞やほととぎす 炭俵 句集元禄七 此やは問ふや

此句に三つに考へありて未決せざるの趣、荊口へ消息あり。其之部に

て可見。句集に二句出したる故ここにも二句出す。

時鳥声横たふや水の上 笈日記 句集 初便 泊船集 句撰、●疑のや

にて下にやらんと詞をそへてきくべし。

一声の江に横たふやほととぎす

時鳥まねくや麦のむら尾花 句集に夏のとあり。泊船集 句撰 あらまき

曙やまた朔日にほととぎす 句集追加 拾遺

橘やいつの野中のほととぎす 卯辰集

鳥賊売の声まぎらはし時鳥 泊船集 句撰 句集元禄七

さし竿書たる扇に

鳥さしも竿や捨けん郭公 ●里、捨てたであろう 千鳥掛集

子規なくや黒戸の涙ひさし もとの水 晩山へ消息にあり。

京にても京なつかしや子規 泊船集に京に居てとあり。小春へ消息 句集

元禄四 泊船集 句撰

田や麦や中にも夏の時鳥 あらまき 後拾遺 一葉に仙台にてとはしがき

牡丹花の賛

風月の財をわすれよ深見草 (存疑) 後拾遺

### 松魚 茄子

かつを売いかなる人を酔すらん 句集貞享四 泊船集 句撰

●里 (魚都里) どのような であろう。

鎌倉を生て出けむはつ堅魚 ●出たであろう。句集元禄五 句撰 古セン

○葛の松原に詩歌に名所を用いる事たやすからし。(中略) 生きて出る

といふに鎌倉の五文字、又その外あるべからず。(中略) つらつら思

へば生死のさかひを以て出入せむに、鎌倉六波羅の外殊にあるべから

ず。

あり。一葉に七文字、中にも市のとあり。

### 牡丹

三歌仙に、二度<sup>たび</sup>熱田に草鞋をときて林氏桐葉子の家あるじとせし

に、又思ひ立てあつまにくたるとて。

牡丹薬深く分け出る蜂の名残哉 一葉・句撰 句集 △名残哉とたひける

こたへに、うきは茶の葉をつみし跡の独かな 桐葉と三歌仙にあり。

笈日記には、牡丹しべを深く這出る蜂の名残とあり。一説に、後に薬

の字をぬき給ふと云々。○一葉に、いでん 句集二十四丁

贈桃隣新宅自画賛

寒からぬ露や牡丹の花の蜜 句集元禄七 泊船集 句撰

又越ん佐夜の中山初松魚 (存疑) もとの水集に、左衛門へ消息にあり。

大井川水出て塚本氏かもとにとまりて二句

ちさはまだ青葉ながらになすびかな 句集元禄七 句撰 文章之部に出。

●里、になりて。二句の内一句は五月雨の句也。五月雨の所と可見合。

羽黒山に参籠して後鶴ヶ岡にいたり、重行亭にて城下の土長山氏

めずらしや山を出羽の初茄子 附合集 句集 句選 泊船に茄子汁。

### 卯の花 杜若

一葉に悼大巖和尚とあり

梅恋て卯の花拜む泪かな 野ざらし 其角へ消息 句集 句撰

炭俵、卯の花

うのはなやくらき柳の及こし ●詠のや 泊船集 句撰 あらまき

初便 句集元禄七

其角の母五七日追善

卯の花も母なき宿ぞすさまじき ●里、すぎき 附合集に第三迄。句集

貞享四 句撰 続虚栗に、ぞ

鳴海知足亭庭前にて

牡丹花の賛

杜若我に発句のおもひあり 附合集一折 句集貞享二

大坂にてある人のもとにて

杜若語るも旅のひとつかな 笈の小文 句集 句撰

二十五丁

手のとどく水際うれしかきつばた (誤伝) 句集追加 拾遺

山崎宗鑑やしきにて、近衛殿宗鑑がすがたを見ればかきつばたと

遊ばしけるを思ひ出て、こころのうちにいふ。

有がたき姿を拝むかきつばた 句集貞享五 泊船集 句撰

○山崎宗鑑は初支那号、三即範先と称し、足利家に仕。後城南山崎に

隠る。天文十二年に没、八十五と云々。

○或時道遥院実隆卿へ宗長と共に参として、愛しける杜若を折て献りけるに御覧じて、手に持てる姿を見れば餓鬼つばたと遊しけるを思

ひ出て。

### 夏木立 茂

雲岸寺仏頂和尚の山居の跡

啄木も庵はやぶらず夏木立 小文庫に、仏頂禅師の庵をたゞくとあり。

細道 句集 泊船集 句撰

幻住庵之記 文章の部に

先たのむ椎の木もあり夏木立 句集元禄二 泊船集 句撰

大垣の城主日光御代参勤させ給ふに

扈從す岡田氏某に送る

篠の露袴にかけし茂りかな ●イに、道の 附合集 続猿蓑 句集元禄七

泊船集 句撰

ひかり合ふ二つの山のしげりかな (誤) 後拾遺

嵐山藪のしげりや風の筋 嵯峨日記 句集 拾遺

### 若葉 夏野 鹿

笈日記に、西大寺に詣して

青葉して御目の雫ぬくは々や ●若葉しては、にてと云心にあるなり。

笈の小文 泊船集 句集

あなたふと青葉若葉の日の光 細道に出て日光の句也。句集 句撰 あ

らまき

那須高久覚左衛門所持の短冊に、あらたふと木の下闇も日の光

とあり。●あら、とも

那須の余瀬翠桃亭を訪て

馬草負ふ人を枝をりの夏野かな 附合集歌仙 細道に桃翠とあり。

落悟のぬし、をさなきものをうしなひける事をいたみて、

もろき人にたとへん花も夏野かな 笈日記 泊船集 句撰 句集貞享五

あらまき

二十六丁

馬ほくほく我を絵に見る夏野かな 一葉集に、画賛とあり。

○一葉集に馬ほくほく我を絵に見る枯野哉。はしめは夏野と云吟なれど、一通有しにや。猶画讚とあれば訂正の為爰に挙て云。又書に甲斐の郡内といふ所に出る途中の吟、夏馬ほくほく我を絵に見る心哉。又、同書歌仙之部には、夏馬連行我を絵に見るこころ哉ともあり。

○泊船集に枯野或は夏野とも二説也。句撰は枯野、句集貞享元、夏野也。灌仏の日に生れあふ鹿の子哉

旧友に奈良にてわかる

鹿の角先一節のわかれ哉

此句のこと春の部、くさくさとある所に二又にわかれ初めけり鹿の角として出しなり。其頭半し可見合。

### 芥子 螢

白芥子や時雨の花の咲つらん ●里、たので、あろう。句集貞享元 句撰

贈杜国

白けしにはねもぐ蝶の形見かな 野ざらし 句撰 句集

海士の顔先見らるゝやけしの花 笈の小文・須磨 句集 句撰 あらまき

愚に聞く荊をつかむ螢かな 句集貞享四 句撰

木曾路の旅思ひ立て、大津にとまるところ瀬田の螢見に出て、

此螢田毎の月にくらへ見ん 句集貞享五

草の葉を落るより飛ほたる哉

瀬田の螢見

ほたる見や船頭酔て覚束な 猿蓑 去来へ消息 泊船集 句撰 古撰

句集元禄三 ○去来へ消息には、此中上林三老之所にて

己が火を木々の螢や花のやど 泊船集 句集元禄四

昼見れば首筋赤きほたるかな (存疑) 句集追加 句撰 古撰  
●赤きかなと上へあげてみる哉也。

### 水鶏 夏の月

白川の関にて

関守の宿を水鶏に問ふものを 後拾遺 句集元禄二

一葉に、白川に住何云へ文をつかはすはしに、とあり。

泊船集に、大津湖仙亭

此宿は水鶏もしらぬ扉かな 笈日記 句撰 あらまき 句集元禄四

一に、かりねす。○露川は月空居士と称す伊賀の人。笈日記 句撰

露川がともがら、佐屋まで道送りしてともに隠士山田氏が亭にとめられて、

二十七丁

水鶏なくと人のいへばや佐屋泊り ●いふによつて ●するらん

附合集 句集元禄七 句撰

拵ふて出れば水鶏やわたし守 (存疑) 後拾遺

月はあれど留守のやふ也須磨の夏 笈の小文 句集 句撰

月見ても物たらはすや須磨の夏 笈の小文 句集 泊船集

### あかし夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月 ●夢をみるらん 笈の小文 猿蓑集 句撰

古撰 泊船集 あらまき ●里、ちへいらす ●此をは、下の打あふ

泪を略たる也。

○舞子の浜の辺にてちさき壺に糸を付て海中に下おけば、其つぼの中へ  
蛸這入るを曳上げると也。夫故彼辺、小蛸沢山也とも、つぼをたてつ  
ぼと云と也。

手を打ば木魂に明る夏の月 嵯峨日記 句集

松島眺望

松しまや夏を衣裳に水と月(初出)

○此句は新発田城下、中村竹市なるものゝ短冊にあり。彼もの塚を築  
て衣裳塚と呼ぶ。

夏の月御油より出て赤坂か 句集元禄七 句撰

此かを、赤坂やとして、此やは珍しきや也。是は上にあるへきやを下へ  
まわされた山にて、夏の月や御油より出て赤坂にてと云へきを、一句を  
皆やにてうけて、夏の月のほどなきを嘆息せられし也と云々。

大井川浪に塵なし夏の月

此句は、此下のくさくさの部に出す清滝やの句と可見合。

あやめ

あやめ生り軒の鯛のされかうべ 拾遺延宝七 句集

俗士にさそはれて(一葉に、いさなはれて)五月四日吉岡求馬を見る。

五日はや死すと聞て、

花あやめ一夜にかれしもとめかな 句集貞享五 拾遺

あやめ草足にむすはん草鞋の緒 細道 其名 消息 句集

足<sup>あし</sup>を足とよむといふ。俗説あれともあしし、やはりあしとよむへし。

五月雨 夏の雨

一葉に、阿武隈川の水源にて、

五月雨は瀧ふりうつむみかさかな 句集追加

楢山や柴して戻る夏の雨(存疑) もとの水

しなのゝ洗馬

つゆはれのわたくし雨や雲ちきれ(存疑) もとの水

二十八丁

病中自詠

髪はへて容顔蒼し五月雨 句集貞享四 泊船集 句撰 あらまき

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋 ●橋ならん あらの 句集貞享五

泊船集 句撰 あらまき

○此句を葛の松原に五月雨の増すそまさぬそといふものを、唐土には五  
湖あり、倭には一二にも過へからすと云々。

笠島はいつこ五月のぬかりみち 細道 文章の部 猿蓑

●いつこは里、どれどこじや ●一に笠島や・句撰にいつこ五月雨とあり。

平泉中尊寺にてとも

五月雨のふりのこしてや光堂 細道 句集 句撰 泊船集

句撰に仙人掌岸に水みなぎり舟危し。

五月雨をあつめて早し最上川 ●すゝしとも 附合集歌仙 細道

句集 泊船集

日の道や葵かたふく五月雨 ●雑のや 猿蓑 泊船集 句撰 古撰 あら

まき 句集元禄三

泊船集、句集・句撰等に桑のはたとあり。又桑むしろともあり。

五月雨や蚕わつらふ桑はたけ 韻塞 続猿蓑

湖水はれて比叡降のこす五月雨 後拾遺

一葉集に、長貞亭、海ははれてひえ降の寺五月哉とあり。

五月雨や色紙へきたる壁の跡 嵯峨日記 泊船集 句選 笈日記に、色

紙まくれし、とあり。

露沾公に申侍る。一葉に露沾へ申侍るとあり。露沾ならばははべるとはな  
かるべし。

五月雨に鳩の浮巢を見に行ん 句集元禄六 句選 泊船集 あらまき

大井川出水、塚本氏にて二句、一句茄子の句にて上の茄子の所に出しより。

五月雨の雲吹きおとせ大井川 文章の部 泊船集 句選 句集元禄七

### 麦 合歡の花

麦刈娘に物いひて

青さしや草餅の穂に出つらん みなしくり (イに青はし)

●つらんは里に、たのであろう。

伊豆国蛭ヶ小島の桑門にあふて (イに山中に)

いさともに穂麦くらはん草枕 野ざらし 句選 句集

甲斐国山家に立よりて

行く駒の麦になぐさむやとりかな 野ざらし 句選 句集

麦の穂や涙に染て啼く雲雀 嵯峨日記 拾遺 句集

二十九丁

五月上旬 (一葉に十一日) 武府を出て故郷に赴く。川崎まで人々

送り来りて餞別の句をいふ。そのかへし。

麦の穂をたよりにつかむわかれ哉 後拾遺

莊殿の柱によりて合歡の花 (存疑)

象潟

象潟や雨に西施がねふの花 ●花ならん 細道 句集 句選

早苗 田植 田植して 五月乙女

雨折々おもふ事なき早苗かな あらまき 句集貞享四

早苗とる手もとや昔しのふ摺 おくの細道 文章の部 卯辰集に、早

苗つかむとあり。句選に忍摺の名を尋てとはれし事あり。

奥州今の白川にて

早苗にも我色黒き日数かな 句集元禄二 句選 あらまき

送別

手はなせは夕風やとる早苗かな (存疑) 俳諧古撰

西か東かまつ早苗にも風の音 句集

一葉集に、奥州今の白川に出 二句とありて一句は上の出で、

早苗にも我が色黒きといふ句也。

田一枚植て立去る柳かな 一葉に芦野とあり。古撰にも芦野柳 泊船

集 句選 句集 細みち △ 清水なかるゝの柳

四月十二日、奥州岩瀬郡相良伊左衛門亭にて。附合集に、須賀川

駅等窮とあり。

風流のはじめやおくの田植うた 文章の部、乍単斎等窮亭 猿蓑に、

白川の関にてとあり。細みち 句集 句選 泊船集

蔵田氏に遊びて

柴付し馬の戻りや田植歌 句集元禄七 拾遺

尾張にて旧交に対す。初便集に、名護屋にてとあり。

世を旅に代かく小田の行戻り 笈日記に、元禄七年前の五月なるべし

と云々。句集 句選

五月乙女にしかた望んしのふ摺 蕉句後拾遺

紫陽花 竹の子

三十丁

紫陽花や藪を小庭の別座敷 別座敷集 句集 句選 一葉には、子珊

亭にてとあり。

あちさみや帷子時の薄浅黄 句集追加 句選 あらまき

うきふしや竹の子となる人の果 嵯峨日記 泊船 句集 句選 あらまき

竹の子や稚き時の絵のすさひ 嵯峨日記 泊船 句集 句選 あらまき

四度結びたる深川の庵を立出るとて

鶯や竹の子藪に老を啼 炭俵 泊船集 句選 句集元禄七 あらまき

新麦や笋時の草の庵 (存疑) 蕉句後拾遺

老僧の竹の子をかむ涙かな (誤伝)

瓜 真桑 夕顔

河野松波宅にて

瓜の花雪いかなるわすれ草 文章の部 句集貞享四

秀芳軒宜白のまねきに応じて稲葉山の松の下涼みして、長途の愁いを

なくさむほと

山陰や身をやしなはん瓜島 句集貞享五 泊船集 句選

酒田の吟

初真桑四つにやわらん輪にやせん 句集元禄二 句選に、堅ににや切らん

泊船集に、たてにやわらん

幻住庵に籠れる頃

夕にも朝にもつかすうりの花 句集元禄二 泊船集 句選

花と実と一度に瓜の盛哉 句集元禄五 泊船集 句選 あらまき

子供等よ昼顔咲ぬ瓜むかん 句集元禄五 泊船集 句選 あらまき

去来が別墅にて

朝露によこれてすゝし瓜の土 句選に瓜の泥とあり。続猿蓑 句集元禄七

泊船集 去来の句に葉かくれをこけて出で瓜の暑かなと云あり。一物涼暑

可御

落柿舎乱吟

三十一丁

柳こり片荷はすゝし初真瓜 附合集 句集元禄七 泊船集 句選

之道に對して

われに似な二つにわれし真桑瓜 句集元禄七 句選 泊船集

●制止のな

人々つとひて、瓜の名所数多いひ出ける中に

瓜の皮むひた所や蓮台寺 句集 句選 泊船集

夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて 句集貞享元 泊船集天和の頃、白し

夕顔や秋は色々の瓢かな あら野 句集貞享五 泊船集 古撰 句選

あらまき

夕顔に干瓢むひてあそひけり 句集元禄七 句選

ゆふ貌や酔て顔出す窓の穴 続猿 句集元禄五 後拾遺に昼顔やとあり。

此句を秋の部に出す集もあり。天爾波に、や・哉は変例にて正しから

ず、一時の変化なるべし。此俳諧者流や、哉に目をつけて何ぞ秘事伝

授もあるやうに云なせといはは、ひかこと也。やと哉とよく弁へは、

何ぞや哉も苦しからんと云へり。文長き故下略也。

風薫 夏羽織

丈山の像に謁す

風かをる羽織は襟もつくるはず

後拾遺 出羽新庄盛信亭

風の香も南に近し最上川 一葉に、最上川二句とありて、一句は五月雨を集めて早しと云句なり。

小倉山常寂寺にて

松杉をほめてや風のかほる音

句集元禄七 泊船集 句選

加賀へ文通

風薫る越の白根を国の花 後拾遺

游刀亭納涼二句

漣やかせのかをりの相拍子 此二句の一は湖や暑ををしむと云し句也。

暑の部に出。又、笈日記に此二句は去年の夏此辺に游吟してとあり。

笈日記は元禄八年の撰なれば、此句は七年の游吟なるへし。句集には

元禄四年とす。泊船集 句選 後拾遺

弁慶が七ツ道具の山刀豆は日本一のかうのもの哉。この狂歌の心をも

ちて、

弁慶は夏も紙衣の羽織かな 去来へ消息の部 後拾遺

三十二丁

わかればや笠手に提て夏羽織 後拾遺

くさくさ 草の類 一題に一句なるをここ一同にするす。但、

安羅野、山路にて

夏来てもたゞ一つ葉の一葉哉 あら野にひとつ哉。ひとつ葉は石草也。

笈の小文 笈日記 泊船集 句選 古撰

山賊のおとかひ閉るむくらかな 続虚栗に甲斐山中

△一葉に、甲斐山中二句、とあり。一句は行く駒の麦になぐさむと云句也。句集貞享三 句選

平泉

夏草や兵どもの夢の跡 細道 猿蓑 句選 句集 あらまき 古撰

附合集、元禄元年辰六月大津奇香亭興行

薨のみしか夜眠る昼間かな

○薨の季は秋に定れども六月末より、咲くもの也。且短夜とあり。口口に

六月とあれば夏野部に出也。ひるかをはねふると云にヒビキあしからん。

句集に元禄三大津箕香亭鼓子花のとあり。一葉にも、ひるかほとあり。

韻塞、東武吟行のころ美濃路(一に大垣より)平田の李由のもと父の音信

に、

昼貌に昼寝せうもの床の山 句集元禄七 泊船集 句選

夏豆の二葉や麦の株かへし (誤伝) 後拾遺

木類

三歌仙 木曾を経て武の深川へくるとて

思ひたつ木曾や四月の桜狩 句集貞享三、三歌仙・一葉等、和五文字思

ひ出すとあれとも、附合集に思ひたつとある方はならん。

木・生類雑と名目をわかれて見出すにや。



附合集、元禄二年卯月二四日梁井弥三郎宅にて

句集 此宿の傍に大なる栗の木陰をたのみて世をいとふ層あり。可伸といふ。

世の人の見つけぬ花や軒の栗

△此句は細道・泊船集・句選・あらまき・句集等には本文の通り出たり。附合集には、隠家や目にたぬ花を軒の栗とあり。一葉集には、桑門可伸のぬしは桑の木の下に庵をむすへり。かくれ家や目にたぬ花を軒の栗とあり。

武隈の松

桜より松は二木を三月こし 細道に文章あり。泊船集 句選 句集

我松しまの松といふあるを苦屋かしたる案内の海士人に習ひて、

三十三丁

松の花苦屋見に来る序かな

是は松島独吟とて板行せる書に出たり。独吟一歌仙有あり。松の花は、

初春の季なれとも、松島行脚は夏なれはこゝに掲す。

柚の花にむかし忍はん料理の間 嵯峨日記 泊船集 句選 句集

一に、むかしをしのおぶ

句集 癸酉年、森川許六離別の詞 文章之部に出

椎の花のこゝろにも似よ木曾の旅 泊船集 句集 あらまき 句選等も

同じ。此句、続猿蓑に許六か木曾路におもむく時とありて、旅人の心にも似よ椎の花とあり。

許六は森川氏五老井と号す。菊阿仏とも号す。江州彦根の藩士也。画

を狩野永興安信に学んで善す。正徳五年没す。六十歳、元禄九年十二月、韻塞集を著す、またつゝいて風俗文選を著す。

道芝にやすらひて

とんみりとあふちや雨の花くもり 泊船集 句選 句集元禄七

駿河の国に入て

駿河路や花橋も茶のほひ

炭俵に島田よりの便にとあり。文章之部に出。句集元禄七年 拾遺

清滝や浪にちりこむ青松葉 句集元禄七

○此句、笈日記に元禄七年十月九日、支考に此事は去来にも語りおけるが、此度嵯峨にて申侍る大井川の発句覚へ侍るか被申しを、アと答て大井川浪にちりなし夏の月と吟じ申しければ、その句園女か白菊の塵にまぎらはし。是もなき跡の妄執とおもへはなしかへ侍る。とて清

滝や浪にちり込青松葉ときこへしと云々。

榎の実や花なき蟬の世つすて酒 みなし栗 句集

句選に、花なき里のとあり。泊船集に、題しらすとして此句を出し、是はみ

なしの句也と云々。

関の住、素牛のぬし大垣の旅店を訪れける。かの藤しろみかさといひけ

ん。花は宗祇のむかしに句ひて

藤の実は俳諧にせん花のあと 句集追加 句選

夏山や杉に夕日の一里 鐘本ノママ (存疑) もとの水 鐘 ショウ・アツ

マル・ヤシナウ・アタル・サカツキ・鐘・ショウ・ツキカネ・ガツキ也。あふちのをひものは樗の葉をとりてハクとして悪鬼せらる。又、あふちは今せんだんといふ木也。此ことこゝに用なくしと思ひ出まゝしるす。

日の入の雲吹はらへむら標 (誤伝) 句集 笈の小文 句選

●標ヌルデ・アウチ、標莖 アフチツタ あふちのおひものは標の葉をとりて佩として悪鬼せらる。又、あふちは今センダンと云木也と、此ことここは用なくして思ひ出るままに記す。

木因亭にて竹睡日

ふらすとも竹植る日は蓑と笠 泊船集 句選 句集追加 笈日記

須磨寺や籟かぬ笛きく木下闇 句集 笈の小文 句選

### 生類

卯月の末(一に、はしめ)庵にかへして旅のつかれをはらすとて、(一)程に(一)にはらすとはかり)

夏衣いまた虱を取つくさす 野ざらし紀行 句集 句選 あらまき

三十四丁

蝸牛角ふりわけよ須磨明石 笈の小文 あらまき 句集 句選

此句、句選には此道這わたるといへるも、夏の事にやと前書きあり。

莊子、有国蝸牛左角者曰觸氏。国右角者蛮氏。

蚤虱馬の尿する枕もと 泊船集に、ばりこく 細道 猿蓑 句集 句撰拾

初便にはヒキ

這出よかひやか下の蟻ヒキの聲 猿蓑 句集 句撰には春之部

△かひやの文字、蚊火屋也。鹿火屋は別品也とあらまきにいり。○朝霞か

ひやか下になく蛙声たにきかはわれこひめやも、此分によらす春句なるべし。

能なしの寝し我をきやうきやうし 嵯峨日記 拾遺 句集

うき我を淋しからせよかんこ鳥 嵯峨日記 猿蓑 あらまき 句撰 泊船集

或人の話に此句さひしからするとあらは、是常のことにて何を以てか感応あらんと、けにことほり也。僅に一字二字の境にて発句になるとならずあるべし。

我宿は蚊の小さきを馳走かな 一に、も馳走なり。 泊船集 句撰 句集元 禄四

韻塞 許六離別品二句一句は上の木類之所に椎の花のと云々の句也。

うき人の旅にも習へ木曾の蠅 泊船集 句集

### 雑 是は雑句にあらす色々

混雑の雑なり

盤齋うしろむきたる像世の中をうしろになして山里にそむきはてゝも墨染の袖といふに

団扇もてあふかん人のうしろむき 一にとつて、

笈日記に、うしろつき 句集元禄二

うらみの瀧

しはらくは滝に籠るや夏の初 句集に、ほとゝきすうらみの瀧のうら表

と云句と二句ならへ出せり。細道 拾遺

修験光明寺行者堂 一葉に、那須の光明寺にてとあり。

夏山に足駄を拜む首途かな 細道 句集 句撰

笈も太刀も五月にかされ紙職 一葉に、医王寺にてとあり。細道 句集

句撰

最上秋鴉主人の佳景に対す

山も庭にうき入るゝや夏座敷 句集元禄二 あらまき

松島 前書 文章之部

島々や千々にくたけて夏の海 句集に、くたきて 句集元禄二 あらまき

六月四日羽黒山本坊におひて俳諧興行

有かたや雪をかほらす南谷 附合集に風の音とあり。

一葉集に、羽黒山会覚阿闍梨の別院、南谷本坊にて、有かたや雪をめぐらす風の音 句撰 句集

三十五丁

新庄風流亭興行

水のおく氷室尋ぬるやなきかな 附合集に第三迄 句集元禄二

出羽三山巡礼三句の内

語られぬ湯殿にぬらす袂かな 是は夏の句にもあらねと巡礼は六月のこと

なれば夏に出 おくの細道 句撰 句集

粽ゆふ片手にはさむひたひ髪 猿蓑 句集元禄四 泊船集 句撰

△此句、泊船集に物語のすかたと一集にはあるへきものとて、去来か猿蓑にせされしよしうけたまはりぬ、とあり。

井狩氏水楼

世の夏や湖水にうかふ浪の上 一に、たゝむ 句集元禄四 拾遺

晋の淵明をうらやむ

窓形に昼寝の台やたかむしろ △一に本にゴザヤ あらまきに同。又一

本に夢や 句集元禄五 泊船集 句撰 ○たかむしろは算之字彙に

竹席之細竹を編たるむしろ也。

水無月や鯛はあれとも塩くしら 此どもは下へやつはりといふ詞を加へ

て心うへし。 句集元禄五 泊船集 句撰 ●みな月や君の情けにあ

ひそめてうくて小鯛は今も有けり。

なまくさし小なきが上の鮓の腸 小文庫 句集元禄六 あらまき 泊船

一木秋句とす。○こなき水葱也。似芦生沢田。鮓一作

五月三十日の富士の思ひ出らるゝに

目にかゝる時やこと更五月不二 句撰に箱根の関越とあり。泊船集

句集元禄七

野明亭

清滝の水汲よせてとてころてん 泊船集にくませてやとあり。笈日記

あらまき 句撰 句集元禄七 ○泊船集に清滝の水くませてやとて

てんとありしは、野明に引ききすてさせ給ふ。笈日記にみづくみよせ

てといふはあやまりなるよしと云々。

浅香山帷子干て通りけり (存疑)

遠浅や夏の日の出の舟ころもとの水 (存疑)

なつ山や紙すく里は飯時分 もとの水 (存疑)

短夜や駅路の鈴の耳につく (存疑) もとの水

嶺入や一里おくるゝ小山伏 (存疑) もとの水 順の嶺入、春の

嶺とも云。三月逆の嶺入本山七日富士は八日。

山のすがた蚕の茶臼の霞哉 本事のまゝ 句撰拾遺

富士の風や扇にのせて江戸みやけ 句撰拾遺

夏寒し大仏暮ぬ堂の内 (存疑) 句撰拾遺

冷汁や須磨に淡路の帆掛船 (存疑) 句撰拾遺

三十六丁

川狩や伊勢武者は皆赤ふどし (誤伝) 蕉句 後拾遺 伊勢武者は皆ひ

おどしのよろい着て宇治の網代にかゝりぬるかな 源仲綱

元禄七年六月二十一日大津木節亭にて

秋ちかき心のよりや四疊半 一本、よる 附合集 一葉よるや

撫子 蓮 紅葉

酔て寝ん撫子咲る石の上 句集元禄四 拾遺 あらまき

正成像

鐵肝石心此人之情

なてしこにかゝるなみだや楠の露 句集元禄四 泊船集 句選 あらまき

本間主馬か亭にまねかれしに大夫か家名を称して二句。一句は下に出、

ひらひらとあくる扇やの句也。○主馬は天津の人能大夫也。丹野と号す。

蓮の香に目をかよはすや面の鼻 泊船集 句選 大津丹野亭とあり。笈

日記 句集元禄四

尋れば蓮の君子の門はしら (存疑) 後拾遺

爪紅の末摘花のゆかりかな (存疑) 後拾遺 ○此二句一葉に清風亭二句

とあり。

まゆはけを佛にして紅のはな 一にまゆはきを 卯辰集 おくの細道

句集 句選 泊船集に眉掃を

行末は誰か肌ふれん紅の華 句選

暑 雲の峯

蛤の口しめて居る暑かな (存疑) もとの水

水無月はふく病やみの暑かな 句集元禄四 拾遺 △此句葛の松原にいつ

の夏ならん。みな月はふく病やみの暑かなといふ句を人の得しらざり

けむは源氏の卷々に心をとどめねばさもあるべしと云々。

殺生石

石の香や夏草赤く露暑し 句集元禄二 泊船集 句選 あらまき

附合集、寺島彦助亭

暑き日を海に入れたり最上川 ○泊船集には、すゝしさやとあつき日を

と二句出す。細道と句集に暑き日を海にと出。附合集にはすゝしさ

や海に入るたるとして出。

游刀亭二句 一句は上の風薫の所に出てさゝ波やと云句也。

湖や暑ををしむ雲の峯 元禄七年也。句集に四年とす。句選

三七丁

本間主馬二句 一句は上の蓮の句

ひらひらと「あくる扇や雲の峯

二九日扱こそ得たれ雲の峯 (存疑) 後拾遺 あらまき

雲の峯いくつ崩れて月の山 泊船集 句選 句集○此句はおくの細道

に出て出羽国三山巡礼の一句月山の句也。

嵐山

六月や峯に雲おくあらし山 句集元禄七 句選 あらまき 古撰

此句雲の峯とはなければとも全く雲の峯の句なる故にここに出す。

蟬 清水

稲葉山

撞鐘もひゞくやうなり蟬の声 笈日記 句集貞享五 泊船集 句選

無常迅速

やかて死ぬけしきも見へす蟬の声 ●やかて、里はとりもなほさず、又、

このまますくに。 一に、けしきは。猿蓑 卯辰集 句選 古撰

句集元三 あらまき

人に帷子をもらひて

いてや我よき布着たり蟬の声 ●里にそうぢやといふても 句選と拾遺  
に、蟬衣とあり。句集追加

羽州山形領立石寺

閑さや岩にしみ入る蟬の声 細道 古撰 泊船集 句選 句集 あらまき  
梢からあたに落けり蟬のから 一葉に梢より、あたには、たのみなく

拾遺延宝六 句集

声にみななきしまふてやせみのから (誤伝) 拾遺

さゝれ蟹足はひ上る清水かな 一本に、はひのぼる。小々蟹也。山潤地

蒙生。 句集貞享四 句選 あらまき 続みなしくり

岐阜山

城あとや古井の清水先とはん ●詠のやは、べつにかへてきくへし。

笈日記 泊船集 句選 句集貞享五 あらまき

那須の温泉大明神の相殿に八幡宮を移し奉り、両神一方に拝れ給ふ。

湯を結ぶちかひもおなし岩清水 句集元禄二 泊船集 句選

むすふよりはや歯にひくく清水哉 北枝へ消息にまつ歯にひくくとあ

り、句集には、はや歯にとあり。

三十八丁

芳野西行庵

硯洗ふ知恵は出たり苔清水 (存疑) もとの水

土用干 夏の夜

掛て置払子は知恵の土用干 猿蓑 句集 泊船集 句撰 あらまき

千子が身まかりけるを聞て美濃国より去来がもとへ申遣し侍りける。

なき人の小袖も今は土用ほし ●古撰の、文子とあり。●疑のやほすや

ほさぬやを問ふやなり。又云、此やは下にあらんとか、なるらんとか  
詞をそへてきかばや也。●するらん。○去来は向井氏、落柿舎と号す。  
長崎の人也洛西嵯峨に住す。

夏の夜や木魂に明る下駄の音 嵯峨日記 句集

湖水辺菅沼氏曲翠亭六月十六日

夏の夜や崩れて明しひやし物 句集元禄七 泊船集 一葉にかせん ●詠

のや ○曲翠は菅沼外記と称。膳所藩の士也。○此句猿蓑に出て、

支考が今宵賦あり。文長き故こゝに不出、其文中阿曲又八深川の庵に

四年の春秋をかさねてことしみな月五日の遊びを渡りて伊賀の山中に

父母の古墳をとぶらひ洛の嵯峨山に旅寝し、湖の納涼をわすれかたく

ここにわらじをとくとあり。

笈日記、名にしあへる鵜飼と云ものを見待らんとて、暮かけていさな

ひ申されしに人々稲葉山のこかけに席をまふけ盃をあげて、

またたくい長良の川の鮎なます 句集貞享五

鵜飼を見る鵜船も通り過る程に帰るとて、

おもしろふてやかて悲しき鵜船哉 ●里にとりもなをさずそのまゝすぐ

に。安羅野 泊船集 句選 古撰に岐阜にてとあり。●やがては俗

にとりもなおさず、又そのまますぐになど云心也。

巢立せり鵜の子や海を恋るらん (存疑) 句集 あらまき

一文の酔の銭落す鵜川哉 (存疑) 後拾遺

破風口に日影やよわる夕すゝみ

唐破風や日影かける夕すゝみ ○かけらう

唐破風の入りや薄き夕すゝみ ○此三句泊船集と句選に唐破風の入りや

附合集に納涼の折々いひ捨たる和漢月の前にしていたしむ。破風口に日影やよはる夕すゝみとして素堂と和漢の対吟あり。蕉句後拾遺には唐破風や日影かける夕すゝみとして出せり。

三九丁

皿鉢のほかに闇の宵涼み 後拾遺

佐夜の中山にて

命なりわつかの笠の下すゝみ 拾遺延宝四 あらまき △年を経て又

こゆへしとおもひきや命なりけりさよの中山 円位法師

風漠を餞別す

わすれすは小夜の中山にてすゝめ ●里、此にては、で。句集貞享三句選

尾花沢清風亭

涼しさを我宿にしてねまるなり 細道 句集 句選

涼しさやほの三日月の羽黒山 此句、おくの細道に出て出羽国三山巡礼

の内の一句也。

附合集、酒田の湊伊藤不玉亭にて袖の浦眺望

あつみ山や吹浦かけて夕すゝみ 細道 句集 句選 初便

汐越や露はぎぬれて海すゝし 細道 句集 句選 初便 ○此句泊船集

に腰長と題ありて、上五文字、腰長や鶴はきぬれてとあり。おくの細

道に出て象潟の句也。

小鯛さす柳すゝしや海士か軒 一に海士か妻 句集元禄二 あらまき

附合集に表

花の上漕くとよまれし桜の老木西行法師の記念をのこす。

夕はれや桜に涼む浪の華 句集 句選 ○船泊集、花の上こくとよみ給

ひけん古き桜もいまた蚶満寺のしりへに残りて陰波を浸せる夕晴いと

涼しかりければと前書あり。△象潟の桜は波に埋れてはなの上こく蟹のつり舟 西行

四条の河原すゝみ 文章部にも出

川風や薄かき着たる夕すゝみ 卯辰集に前書なし。句集元禄二 句選

曲水に遊ひて田家といふ題を置て

飯あふぐ嬬かちそふや夕すゝみ 句選、飯負てと上五文字あり。句集元禄四

泊船集 あらまき 古撰

炭俵に、涼

川中の根木によころふすゝみかな ●名の哉 句選 泊船集

野水閑居を思ひ立けるに

すゝしさを指図に見ゆる住居かな 句選に、涼しさを飛驒の工が指図哉と

云句と此句と二句並べ出せり。笈日記 句集元禄七

雪芝か庭の松を植るを見て

四十丁

涼しさや直ぐに野松の枝の形 笈日記に、こゝに野松とあり。句集元禄七

句選

十八楼之記 文章之部に出

此あたり目に見ゆるものみなすゝし 句集貞享五 句選

東武より上りて人々に對す

東路の毛すねはつかし床すゝみ (誤伝) 句集追加 拾遺

野明亭

すゝしさを絵にうつしけり嵯峨の竹 句集元禄七 句選

百里来たるほとは雲居の下涼し 拾遺

瓜つくる君かあれなど夕涼 拾遺 ○一葉に、住ける人の外に隠れて菴生

しげれる古跡を訪て 瓜作る。

松風の落葉か水の音すゝし 句集貞享元 句選

昼顔に米搗すゝむあはれなり 古撰 句集貞享四

○追加 一葉集而已出

寛文・延宝・天和・年中

啼くやなけ耳のすうなるほとゝきす

口すべれ油月夜のほとゝきす

戸の口に宿札なのれ郭公

黒焼釜わつて捨けりほとゝきす

しはし間もまつやほとゝきす千年

岩つゝじ染る涙やほとゝきす

かきつはた似たりや似たり水の影

時鳥いまた(は)俳諧師なき世かな

五月雨の雨岩檜葉の翠いつまでも

五月の雨に御物遠や月の貌

四十一丁

降る音や耳もすうなる梅の雨

五月雨も瀬ふみ尋ぬみそれ川

さみだれや龍燈あける宵(番)太郎

さみだれや此笠森をさしも竹 (存疑)

こゝろ三河むらさき麦のかきつはた (存疑)

夕貌に見とるとや身もうかりひよん

美しきそのひめゆりや后さね

箔押よこちも身のため夕すゝみ (存疑)

夜狐下はふ玉真桑

○貞享・元禄年中

枝なくて世にかはらぬ蓮かな

文鱗子出山の像を贈られければ

南も佛草の臺もすゝしかれ

○考證

笈負僧(虫損)

みはやな出立出立のほとゝきす (存疑)

発心の時

拙(虫損)杯は野に臥すこもたのしきやなとあるじの間はれければ

さみたれに寒いまゝなり旅すかた (存疑)

李青く竹笠破て石あふなし (存疑)

或人云、信州にての吟なりと

四十二丁

のりたやと子の声くらき鞆船かな

光明寺にて

汗の香に衣ふるはむ行堂